植村高久先生のご退職にあたって

植村高久先生は平成30年３月31日をもって，本学を定年によりご退職されます。先生の34年の長きにわたるご貢献に心より感謝し，本号を退職記念号として発行いたします。

先生は和歌山大学経済学部をご卒業の後，東京大学大学院経済学研究科に進まれました。博士課程を修了された後，昭和59年４月に専任講師として山口大学教養部に迎えられました。その後の教養部改組そして解体の流れの中で，昭和62年６月に助教授に昇任されました。平成８年４月教養部廃止に伴い経済学部に移られ，同年８月，教授に昇任されました。先生は理論経済学や経済政策がご専門で，教育，研究，運営など様々な面において活躍され，経済学部はもとより山口大学の発展に寄与されました。

先生は制度派経済学の分野で活躍され，特にマルクス経済学の視座から現代社会の諸問題に鋭く切り込まれ，旺盛な研究心を持って成果をだされました。特に，平成９年に上梓されたご著書『制度と資本－マルクスから経済秩序へ－』は斯界で高く評価されています。その後も『東アジア市場経済－多様性と可能性－』，『模索する社会の諸相』，『現代マルクス経済学のフロンティア』，『グローバル資本主義と企業システムの変容』と精力的にご業績をあげられ，急速なグローバル化の流れの中での資本主義の変容，そしてマルクス経済学の再付加価値化を進められました。

先生は教育においては，学部の「政治経済学」や大学院経済学研究科経済学専攻の「制度の経済学研究」等を，また，大学院東アジア研究科の「制度動態特別講義」を担当されました。先生の説得力ある話しぶりは，常々ご講義で配布される膨大な資料と相まって，学生の間では大学本来の講義と評判であったようです。

本年３月２日におこなわれた最終講義は「経済学は役に立つ

か？」という挑戦的な題目で，これまでの学究生活を振り返られました。主流派経済学に対峙し挑戦し続けてこられた先生の最終講義，その熱い思いをお聞きできるとの予想に反し，予定の時間よりもかなり早くご講義を終えられました。その際「このような折には早く終わるものだ」と言われた言葉が印象深く心に刻まれました。

先生は大学・学部運営においても多くの委員を務められました。平成12年から経済学研究科運営委員会委員長を異例の2年間務められ，平成13年４月の大学院東アジア研究科の設置につなげられました。また，学部の就職支援委員長として企業との関係を重視され，厳しい経済状況が続くなか，学生の就職支援に親身になって取り組まれました。その後も大学教育機構学生支援センター長，大学院東アジア研究科長，評議員の重責を担われました。

特に東アジア研究科長として様々な問題に果敢に対処され，困難な状況を乗り越えることに尽力される一方，「研究者行動規範」といった大学として取り組む新たな授業も積極的に担当されました。また，自ら積極的に博士課程院生の指導を担われ，多くの博士号取得者を送り出されました。

近くから拝見し，先生は人にもよく頼み事をされましたが，ご自身も頼めば引き受けていただける先生であり，この事は一貫して変わることはありませんでした。

先生は山口県企業局経営計画委員会委員長，山口県商工業振興対策審議会委員，山口市行政改革推進委員会委員として貢献されました。また山口県こども環境クリーンアップ推進協議会会長も務められ，先生の守備範囲の広さを窺い知ることができました。

この度，定めによりご退職されますが，先生の長年の精力的なご尽力に心より感謝申し上げます。先生のバイタリティと挑戦するご姿勢は今後も変わることが無いと確信します。ぜひ，ご自身

が想定される考究の高みに向けて，より熱くよりタフにご研究を展開されますよう，また，これからも先生との絆が末永く続きますよう切望するとともに，先生のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

平成30年３月31日

山口大学経済学部長　　成　富　　敬